

冬の花火

■枚方市

2月4日(日)午後8時頃、枚方市山之上の田んぼから突然花火が上がった。全国的に大寒波が襲った極寒の夜だった。漆黒の夜空を焦がすたった5分間のショー。100人余りの見物人は、誰しもが寒さを忘れる熱い興奮の時間を過ごした。今年で9回目となった「冬の花火」だ。

仕掛人は地元で生まれ育った50代の幼なじみ2人。きっかけはいつもの飲み話で、子どもの頃の枚方花火大会が目にした。焼いていると話が尽きず、どんどん笑顔になる。ならば、自分たちで花火をあげようと、酒席は夢の話で盛り上がった。さうそく、ネットで花火師を探してみたら、1人の花

火師が快諾してくれた。何もかもが手探りのイベントながら、防犯・防火対策を考慮して警察にも報告し、近隣に迷惑をかけないように自己所有の土地で実行することにした。決して安くはない資金はすべて自腹で捻出することで二人は合意。強い友情で結びついた二人のひそかな恒例行事は、地域はもとより、遠方まで口コミで広がりコートの襟を立てて見物人がやってくるようになった。近隣の高齢者施設の入居者は、窓越しに見る花火に涙を流す。真剣に遊び心を追求してきた男気ふたつ。見返りを求めない行為が、一瞬の冬の輝きとなって、ひっそりと、しかし、しっかりと、人々の心に焼き付いている。

